

ありのまま

何年間か制作を続ける中で最近のアーティストは「作りすぎている」と感じた。写真家である長島有里枝さんとモデルである水原希子さんのインタビューを見たが、そのインタビューの中で「作品に嘘を付きたくない」という発言があって凄く共感ができた。私自身も作品とは自分を示す物や自分を表現する手段だと思っており、作品はありのままの自分じゃないといけないと思う。その理由で、フィルムカメラで制作をし始めた。フィルムカメラは撮影をした後にすぐ撮ったものを確認する事ができないし、現像するまでは成果物を見れないという不便さがある。その不便さが逆に「作りすぎている」現代から解放させてくるかと思った。現代社会の問題だと思うが、制作者だけではなく現代の若者たちは「人に見えてる自分」、「見せないと行けない」という所に執着していると思う。何故なら、SNSを開くと国を問わず、多くの方は自分のSNSを見る他人を意識して「格好をつけた様子」や「より良く見える生活」を投稿している。ある記事でも読んだが、他人の視線を意識しすぎて自分の経済的地位にも合わない高級の物を買ったりする人も多いし、事実ではない作られた日常を見て相対的剥奪感を感じる人も多い。芸術作品も一脈相通ずる所があるだろうと思う。よく見える為、良い評判を貰う為、実はそう思わずに製作したのに嘘をつけて解釈を書いたり、作品その物自体が最初から最後まで嘘である人もいる。表現するのは我々の自由なので、それが別に悪いという訳ではない。しかし、私自身は1%の嘘もつけてない純粋な作品を作りたいと思った。またフィルムカメラの話に戻ると、デジタルカメラとは違うアナログ的な過程を通らないと行けない時代遅れ感があるが「加工ができない」所が魅力的に感じられ、この要素を使って制作しようとしている。表現の為プロセスは使う事もあるが、できるだけ加工は最小限にしてありのままの自分を見せたい。咲いて時間が経ったら萎む植物などを観察したり、自分の視線に写ってる日常などをほぼ加工ができないフィルムカメラやポラロイドを使って表現して行きたいと思った。一つ一つ、「一点物」の作品というより、「作品の工程」つまり、「制作の過程」に重視する真正性のある作品を作りたいと思った。